



第20号

(年2回発行)

発行所

喜多流大島能楽堂

〒720-0814

広島県福山市光南町2-2-2

TEL 084-923-2633

夏の日

喜多流シテ方 大島衣恵

八月のある日、某音楽大学で「教員免許更新講習」の講師を務めました。小・中・高校の音楽教師の方々を対象にした日本の伝統音楽についての講習です。近年の学習指導要領には必ず日本音楽(和楽器)を取り入れることが義務付けられていますが、殆ど西洋音楽だけを学んでこられた音楽の先生方には大変な課題です。日本音楽といっても一括りには出来ませんが、和の音楽に共通する「間」と「息」を能の実技から少しでも感じ取って頂ける講習にしたいと考えました。

とにかく実践あるのみで、「千秋楽」の一節を謡と小鼓、大鼓に分かれて繰り返し何度も稽古しました。丁寧な楽譜もなく、テンポを示すメトロノームもなければ、音程の決め手もない。ただお互いの呼吸をはかって腹に込めた力を声にします。始めは遠慮がちにされていた方も、繰り返しうちに自分の「間」に自信がついてくると謡や掛け声も次第に力強くなり、最終的には充実感を持って頂けたようです。講習後のレポートに「学校の授業でもこの実践を取り入れてみたい」と何名の方が書いて下さり、私にとっても有り難い一日となりました。

又八月初旬に訪れたアメリカでは、R・エマート氏の主宰される「Noh Training Project」の十五周年記念公演に参加しました。参加者には日本語を話せない人も多いのですが、懸命な稽古の末に立派に舞台を勤める姿には心から敬服いたしました。その公演後には本年十二月に控えた新作英語能「PAGODA」の稽古にも掛かりました。古典の能に真摯に向き合っている彼らに恥じぬよう、この新たな作品に挑みたいと思っています。



(アメリカ、ブルームスバーグにて 2009年8月)

P2 フィンランドと日本文化

本田 均

P4 尺八の国際化

リンデル盛盟グンナル

P6 和文化の継承を!

吉原通庸

P8 輝久・衣恵のインタビュコーナー

続 帆足正規先生のご自宅に伺いました

フィンランドと日本文化

前フィンランド大使 本田 均

私は日本の大使として二年半フィンランドで勤務する機会に恵まれました。日本とフィンランドの関係はきわめて良好で、教育、福祉、ITの分野を中心に活発な交流が行われています。ハイレベルだけでなく草の根レベルの交流も活発で、地方都市レベルの交流も盛んです。近年、お互いに相手国の言語や文化に対する関心も高まっており、関係拡大の機運が高まっています。又、フィンランドは、日本語学習者の数が北欧諸国の中で最も多いことでも有名です。

大使館の業務は政治、経済、社会等広範多岐にわたっていますが、特にやりがいを感じたのは文化交流の仕事です。フィンランドのことを「北欧の日本」と呼ぶ人もいる程フィンランドは日本文化の愛好者や担い手が多いからです。日・フィン交流に顕著な貢献をした人を表彰する「館長表彰」という制度が大使館にあります

が、私はこの制度を積極的に活用して、多くのフィンランド人を表彰しました。東山魁夷の絵画の紹介に貢献したマエンパーさん、草月流いけばなの普及に貢献したヌルミネンさん、裏千家茶道の普及に功績のあったエロマーさん等です。エロマーさんは我々日本人もびつくりするほど日本語が流暢で、今回の大島能楽堂のヘルシンキ公演の際、通訳等で大活躍されました。

大使館はこれらの方々々と協力すると共に、地元美術館等と提携しながら多くの日本文化紹介事業を実施し好評を博しました。北斎・広重展や日本女性の歴史をテーマにした展示会等です。今年、日本・フィンランド外交関係開設九〇周年に当たります。大使館は、九〇周年記念として多くの日本文化紹介事業を企画しましたが、最も力を入れたのが、アジア・イン・ヘルシンキ・フェスティバルです。



前列中央、大使ご夫妻

ほんだ ひとし
本田 均 氏

1946年 新潟県長岡市生まれ。

1968年 外務省入省。

ハンガリー公使、
ヒューストン総領事、
ウクライナ大使、
フィンランド大使等を歴任。

これは、ヘルシンキ市が毎年五月アジアの一方国の文化を特集して紹介するもので、今年も日本を特集したいとして大使館に対し日本の文化使節の派遣要請がありました。この催しの準備作業の過程で特に印象的だったのは、ヘルシンキ市当局が能楽師の派遣を熱心に働きかけてきたことです。

フィンランドでは、能楽は根強い人気があり、能公演であれば成功間違いなしというのが彼らの説明でした。

当初、大使館は半信半疑でしたし、日本からの派遣が検討された文化使節の候補はたくさんあったのですが、最終的には能楽を熱望するへ



ルシンキ市関係者の強い意向が決め手となって、大島能楽堂のヘルシンキ公演が実現した次第です。結果的には五月十三、十四、十五日、三日間の公演はいずれも満席となり、ヘルシンキ市の熱望が本物であったことが証明されました。大島能楽堂の皆様が感心する位フィンランド人の観客の態度は、真剣なものでした。今回の公演のためにフィンランド人がアレキサンドラ劇場に立派な能舞台を作ったことや、十年前の八〇周年にはフィンランド人だけの力で能公演を行ったこと等を考えますと、フィンランドは「北欧の日本」というのもあながち誇張ではないかもしれません。シンプルでデザインを好むこ

と等両国民の感性には共通点もあります。この機会にヘルシンキで素晴らしい公演を下さった大島能楽堂の皆様には心から御礼申し上げたいと思います。今回の素晴らしい公演を契機に能楽に対するフィンランド人の関心は一層高まりましたが、フィンランドにはスカイ・ヒルトネンさんのように大島能楽堂と縁の深い方もおられますので今後とも大島能楽堂の皆様がフィンランドとの交流を継続され、日本が誇る素晴らしい伝統文化である能楽を通じて日・フィン交流が益々拡大、発展してゆくことを願っております。

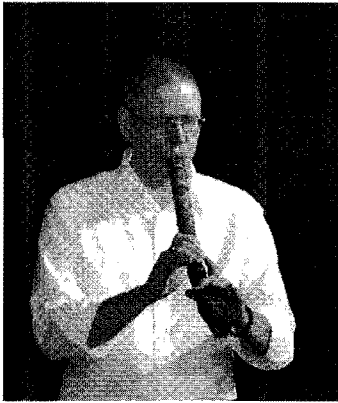


ヘルシンキの学生達へのワークショップ

尺八の国際化

琴古流 尺八師範

リンデル儘盟グンナル



ジンメイ
リンデル儘盟グンナル氏
Gunnar Jinmei Linder

スウェーデン出身。

哲学・日本学専門でスウェーデンの国立ヨテボリ大学卒

1985年初渡来後、尺八を学び、旧山口五郎師(1933-99、重要無形文化財)に師事。

1993年国費留学生として東京芸術大学に学び、1997年に同大学院修士課程を修了。

1998年師範となり「儘盟」の竹号を与えられ、日本国内外においての演奏、指導活動を行う。

現在、演奏活動のほか、ストックホルム大学日本学科での研究および教授のかたわら、スウェーデン王立音楽大学の非常勤講師。尺八のワークショップ・レクチャーなども幅広くおこなっている。

日本の伝統音楽の中で、海外でもっとも普及しているのはおそらく尺八であろう。聴くだけにとどまらず、実際に奏することを含めて、その愛好者人口は、数千人以上、もはや、万単位で数えられるかもしれない。

私事を申せば、去年の夏は「シドニー国際尺八フェスティバル08」に招かれ、また今年の夏は、オランダのライデン市で開かれた「ライデン尺八サマースクール」の講師を勤めた。

初めて海外で国際的な尺八フェスティバルが行われたのは、アメリカ合衆国での「ポルダー国際尺八フェスティバル'98」であり、私もその実行委員会のメンバーの一人であった。

しかし、尺八の欧米への普及が始まったのはそれより三〇年ほど前のことで、私の師匠、故山口五郎師がアメリカのヴェスリアン大学に客員教授として招かれた一九六七年のことであった。日本の伝統芸能における、海外の大学での初の客員教授であった。師は一年間、現地で尺八の教授に努め、その努力のおかげで多くの人々が尺八に魅せられたと聞く。

また、その翌年、横山勝也氏が武満徹作曲の『ノヴェンバーステツプス』をNY交響楽団と共演し、山本邦山氏(重要無形文化財指定)はジャズフェスティバルで尺八を演奏した。

このように、尺八の魅力は古典音楽としてだけでなく、現代音楽やジャズなどの形を通じて海外に紹介され、また、思想としての「禅」の流行によっても、間接的にその存在が知られるようになった。

ヨーロッパでは、二〇〇六年から「サマースクール」という形でワークショップが流行している。二〇〇八年、NPOとしてESS(欧州尺八協会)が英国で正式に登録され、私自身もその組織の顧問として関わっている。

当然のことながら、さまざまな流派で学んだ人たちが構成されている団体であり、一つの流儀にかたよらないように配慮し、日本の伝統的な「家元制度」を超えて、心を広くもち、さまざまな吹き方を受容して、「尺八」を引き立てようとする試みを行っている。

今現在、ヨーロッパでの尺八の流儀は、大きく分ければ六つぐらいある。細かく分ければ、十ほどの流派を代表する外国人指導者たちがいる。

海外で活動している外国人の尺八指導者のほとんどは、日本であろうが、海外であるうが、いつかどこかで尺八を聴いて魅せられた。そして、そのはじめて聴いた尺八の音、流儀が、どうしても「基準」になる傾向がある。日本での尺八の流儀、奏法の幅を知らず、手前勝手に単純化してしまうこともしばしばある。日本に住んでいれば、比較的いろいろな演奏に気軽に聴きに行けるのに対して、海外では、自ら演奏家や指導者を呼ばない限り、生の音が聴けないわけで、そこから生ずることでもあろう。

欧州でのサマースクールや国際尺八フェスティバルを開催することによって、そのような偏った見方をいくらか広くさせることができるのではないかと思う。

しかし、西洋では、尺八の宗教性、あるいは精神性が何よりも大事にされている。それがあってこそその「古い」尺八文化であり、尺八の「本物」、「未来」の姿であるとして、そこに人気が集まっている。

欧州文化には「絶対的なもの」・「唯一のもの」の観念が強い。その考えは、プラトンのアイデアからはじまって、キリスト教の唯一神の概念にも見られようが、今では尺八にまで及ぶようにも思える。尺八には唯一の源がある、と海外では思われており、それが「禅」である、とよく言われている。「パンプーは禅である」などの考え方もっとも一般的であるように思われる。

日本では、古典芸能を学習するにあたり、幅をもっていろいろな流派の芸風を聴きながらも、一人の師匠から指導を受け、それをまねることが「学ぶ」ことである。

しかし、海外で尺八を演奏する外国人の中には、師匠の存在を「ただ一人の自分の師匠」としてでなく、自由に自分の演奏を発展させるための存在としてとらえる人も少なくないように思われる。そうすると、「今日は、諸々先生風に吹いてみよう」ということもできるし、それぞれの師匠の好きなどころを自由に組み合わせて吹くことも可能になってくる。いいかえれば、一つの分野の中のいろいろな芸風を自分自身の観点から学んで、新

しい芸風を生み出そうとしている、といえるかもしれない。

ヨーロッパでは、「A先生、B先生、C流派、D流派の本曲を教えてください」という人もいれば、竹号(師範)を一人以上の師匠からもらっている人もいる。また、基本練習を十分にやらす、好きなどころだけ拾って自分自身で稽古する人も多くいる。日本では、考え難いところであろうと思う。

こういった現象が起きて、今後の尺八界にどんな影響があるのかと考えてみれば、やはり、新しい「欧州尺八本曲」や「欧米流儀」のようなものが現われてもおかしくないように思える。これは、善し悪しということではなく、こういう流れに入っていくのではないかと思う。A流儀とB流儀の結びつきによって、C流儀が生み出されることを認識せざるを得ないことになるのではないか。

尺八はその長い歴史の中で培われてきた魅力をもつて、海外に愛好者を増やし続けているが、その国際化の中で、何を大切にしているか、何を考えなければならないか、と思える。

本年五月、喜多流大島能楽堂の能公演がストックホルムでも開催され、能公演一行が滞在中の通訳を日本大使館より拝命した。東京芸術大学留学中、キャンパスで見かけていた同窓の大島衣恵氏や滝沢成実氏に再会出来たことは大きな喜びだった。

今後益々、日本文化のかけ橋となり、スウェーデンと尺八の魅力の世界に伝えていきたいと思っっている。



和文化的の継承を！

たつじんくらぶ代表

吉原 通庸

大島家との出会いは、茂山千五郎さんの狂言を習うことから始まった。大島家のお稽古場は「和」の懐かしさをかもしだし、そんな場所に一ヶ月に一度行くのも楽しみだった。

また、大胆にも習いたての狂言で、大島家の能楽堂の舞台に立つという、よい経験もさせていただいた。

六年前から公民館で子ども達を対象に「和文文化継承」の講座を開いている。和文文化とは何か？当初は忘れられゆく和の生活文化を主な内容としていたが、子ども達の疑問「和室にある炉用の小さい畳は何？」から茶道を取り入れて、すべてがそこにあると思いつく。翌年から茶道に関するものは？と思うと古典芸能が浮かんだ。能楽、狂言、落語、などの芸能を子ども達が体験することが継承につながるもの。プロフェッショナルから継承を、ということになった。

そして、大島衣恵さんを始め大島家の方々にご協力いただくことになった。狂言では、茂山

家にご協力いただいた。

公民館という社会教育の場での体験ワークショップであったが、三年前から小学校でも受け入れてくださる校長先生と知り合い、続いている。平成二〇年度は援助いただく企業・個人があり、三校で行うことができた。

子ども達の体験ワークショップでの様子はとても楽しげである。大島家の方々の豊かな経験が大きな要素だ。昨年は小中一貫校で行い、中学一年生が参加した。小学生とは違い、授業に対しての態度は真摯さに欠ける。しかし、最後の謡と仕舞鑑賞の場面では、我を忘れるように見入っていた。最後の先生のあいさつでは、授業の成果として、中学生の変貌、子ども達の感受性に響く能楽の魅力、先生方の気づき、などの言葉で締めくくられた。そのように感じる子ども達の素晴らしさがあることに逆に感動する。このことを多くの人に知っていただきたい、と思う。

たつじんくらぶ

ノンプロフィットの活動を行う市民団体。

- 子ども対象—— 広島市内公民館、子ども文化科学館
小学校での古典芸能ワークショップ&塾
子どもアート・プロデューサー養成
- 大人対象—— 古典芸能・和文化関連の講座
定期的な生涯学習の場
- 18歳～35歳対象—ノンプロフィットの活動に興味を持つ人達の人材育成
子ども対象に行ってきた和文文化継承の実績が、今やどの世代にも通じるものとなりました。
和文化に触れ、楽しむことで、4世代間コミュニケーションも可能です。
「広島発 1994年生まれ。
私達の年輪が文化を養い、文化の継承が未来を作る。未来に向けて発信します」

五年生以上を対象に行っているが、自分自身のことを思い返しても、その年代に見たものの素晴らしさは、どこに残っている。それが継承であり、場がなければつながらない。二一年度はさらに学校の数が増えることを願い、資金捻出だ。

小さいときに叔母が練習する「東遊びの……」をまねていた以外は、何の経験もない私も、ワークショップを行うたびに能楽継承の思いが膨らむ。子ども達だけでなく、大人ももっと知って欲しい。

そこで、大島衣恵さんからお聞きした「能と呼吸」「能と身体」という講座を行うことにした。タイトルは「能はカラダにいいらしい」。

能楽をよく知っていらつしやる方と知らないけどカラダにいいって何が？という方々の参加を得、初めて能に触れて、とても興味を持ったという方も何人かいらつしやった。

呼吸法による声の出し方は、ポイストレーニングと言わなくても能楽にある。能楽の身体の運びはバレエやダンスの表現とは違うが、腰を使い身体を鍛える。西洋文化の表現に慣れてきた現代人には新鮮だ。

そこで、「能は脳にいいらしい」というタイトルでやってみよう、ということになった。

2005年(平成17年)2月20日(日曜日)
中国新聞掲載

大島衣恵さん(中央)の指導で、舞の基本の動きを学ぶ児童たち



能のテーマは生死。死を真近に見ることが日常的であった時代に、死者への鎮魂は誰もが痛切に感じたことだろう。能楽は霊界との交信を表現するものが多い。霊界で魂のさまよえる状態は宇宙との一体感でもある。私達は自然界の一部、宇宙の一部。

脳科学という学問では、解明できない人間の脳の状態を表すものではないだろうか。

能舞台を見ることによってその擬似体験ができる。日頃のわずらわしさや分析もなく、無条件に感性の世界へ誘われる。脳はともいい状態。それは心の状態でもある。

七〇〇年前から存続する能楽の世界を宇宙観という視点で、楊貴妃の霊のイメージを想像し

ながら鑑賞するのもよいのではないだろうか。大人も子どももあれこれの予定で忙しい毎日、そろそろ何とかしたいと思う時代になりそうだ。能舞台鑑賞を、心の静まる時間と空間とし、ぜひとも子ども達に体験してもらいたい。そこから、宇宙に関する多様な発想が生まれてくるような気がしている。

そんなことを思っていると、能楽は益々素晴らしいと、次なる企画を練ってみたくなる。

さしあたっては、広島市の小学生に能舞台での鑑賞を実現することだろうか？

また、プラネタリウムでいうのでもいいかしれない？

能楽体験 児童真剣に

広島 発声法や基本動作学ぶ

福山市在住の能楽師大島衣恵さん(三〇)紀恵さん(二八)の姉妹を招き、小学生が能を学ぶ「子ども能楽ワークショップ」が十九日、広島市南区宇品御幸の宇品公民館であった。広島市内の高齢者たちの生きがい探しグループ「たつじんくらぶ」が、伝統芸能に触れてもらおうと企画した。宇品小の児童やその保護者たち四十八人が参加した。衣恵さんの「能は中世のミュージカル。気軽に楽しんで」との呼び掛けで、謡の発声法や舞の基本動作「すり足」の指導を受けた。笛や太鼓の演奏にも挑戦。児童たちは、初めての動作や演奏に悪戦苦闘しながらも、真剣な表情で教わっていた。同小二年大谷珠世さん(六)は「南区宇品御幸は先生の謡がすごく迫力があつた。かっこいい」と能の世界に感激していた。

続

輝久・衣恵のインタビュコーナー

帆足正規先生のご自宅に伺いました

—19号の続編です—

●能を観るといふ事

輝久 よく「能はどう観たらいいんですか？」と聞かれる事があるのですが、これから能を観る人達にはどういったアプローチの仕方が良いのでしょうか？

帆足 観客の観る目を育てていく必要はありませんね。そういった責務は批評家、評論家といった人達にもあると思います。

関西では評論をしている人が能だけじゃなく歌舞伎や音楽等、他の芸能を兼ねている場合が多いんですよ。

それでそつちを中心に観ている人がいざ能を観て何か書くと、どこかピント外れの事を言っている事が多いんです。その原因を考えてみると能と他の芝居とでは、その物に向き合う姿勢が決定的に違うという事があるんです。

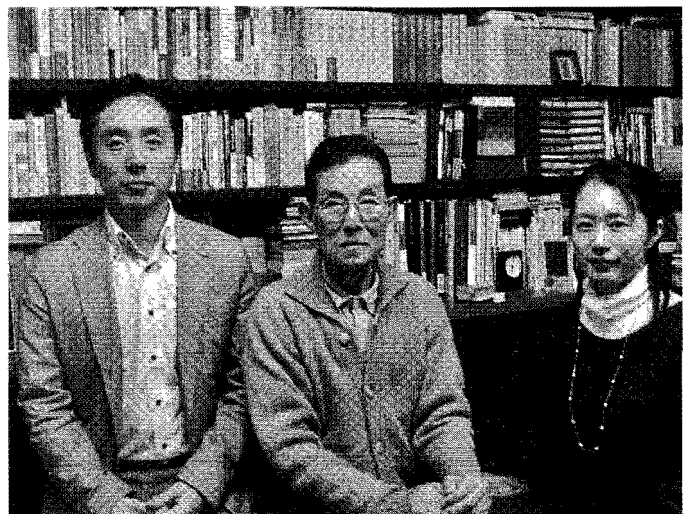
衣恵 観客側がですね？

帆足 そうです。それが分からなければきつと何度観ても能は面白くならないと思います。

例えば謡を習っている人が能を観に来て、ずっと謡本だけを見ている事がありますよね。それはその人の一つの楽しみ方かもしれませんが、初めて観るような人が言葉や文字を追って舞台を観たつて分かりっこないんです。

謡というのは懸詞や縁語を駆使して出来ていきますから、それを追いながら能を観たつて頭が混乱するだけなんです。

芝居を中心に観ている人は芝居の理屈でもってストーリーを追ってしまいう傾向があるんですね。その感覚で能を語られても観客は却つて分からなくなるんじゃないかなあと思う事が多いのです。



端的に言えば、一般の演劇は散文で能は詩ですね。

初めて能を観る観客には、どう能と向き合ったら良いかという事を知らせる必要があると思います。舞台を観ていてほんの一瞬の場面にハッとさせられて、その場面が心から離れない……。そんな感覚を大事にするというか、感性ですね。感性を第一にしていけないと能というのは味わう事の出来ない芸能なんです。ですから演能の前にする解説なども、その辺りを充分考慮し

てやらなければいけませんね。
輝久 はい、肝に命じます。

帆足 ある演能会では大学教授が来て、その日の能に関連する源氏物語の事を延々と話しているんですね。これでは観客は疲れてしまつて能を観るどころではないなあ。

衣恵 ただ感覚で臨むという事を人に伝えるのは難しいですね。文章に書いた物や知性的な事を理解するのと違って、感覚や感性という物を説明するというのは。

帆足 そうなんです、感性というものは言葉では伝えられないんですね。

一つの例えに「物の味は表現出来ない」という言葉があつて、これは谷崎潤一郎が書いているのですが、文章が持つ最大の欠陥だと言っている。

例えばアイスクリームを食べた事の無い人にいくら説明してみた所でその味を伝えきる事は出来ないし、隣の人と同じ物を食べていてお互い「美味しい」と感じてても、その「美味しい」という感覚が他人と同じかどうかなんて全く分からないんです。

そこへきて能というのは至つて感性的な芸能なんです。ですからその魅力を言葉で伝えるというのは大変難しいのです。

また学問的な知識があればある程、そういつ

た感覚や感性といった物から遠ざかつてしまう危険性もある訳です。

能を観るといふ事は、シテならばシテの心に入り込んで、その心情にどう共感出来るか？

それを理屈ではなく発せられる言葉や舞台上の動きの中に感じ取る事が出来るか？ その一点に観る側の勝負は懸かつてくると思います。

こういった事を説明するのは難しいのだけれども、これから能を観る人達にその事だけは伝えておかなければいけないと思つています。

●能の未来

衣恵 能は様々な意味でいま大きな転換期を迎えていると思いますが、今後どのような方向性に進めば良いと思われませんか？

帆足 実は能の経済的な面を考えると、どうしても悲観的になつてしまふのですが……。

京都で考えてみましても西陣の旦那衆が能の稽古をやらなくなつてしまつたりして。昔はそういう人達が能を支えてくれていたんですけれども。

ずいぶん昔の話ですが、西陣の旦那で道成寺を舞うという人がいましたね。その時に唐織を二枚作つて一枚は舞台で使い、もう一枚は小さく切り分けて小袋にして来てくれた観客に配つたとか、そんな豪気な話もあるんですが。

今は旦那衆も社長ですから、そんな自由にお金が使えないんです。

最近若い能楽師がよく「お弟子さんが増えない」と言つて歎いていますが、今まで通り何もかもお弟子さんに頼つていたのでは能は駄目になつてしまふでしょうね。

その点、狂言は一般的な観客を取り込む努力をしてきて今凄く勢いがありますね。凄く勢いだけに観ていると新作などでは稽古が足りないなあと感じる事もありますけど。ただ茂山家にしても長年ずっと学校廻りを赤字同然で続けるなど苦労してきているんですよ。その努力が実を結んで今多くの人に親しまれてきている。能ももつと一般的な観客を増やす努力をしなければいけませんね。

輝久 確かに能楽師は世間にアピールするといふ事が苦手かもしれませぬ。能といふものを一生の修業と捉えている人が多い中で、外にアピールしていく場合どうしてもその道から外れてしまうような事も求められるケースが多々出てきますよね。

そういった時に能楽師自身の心の整理をどう付けていくのか？という問題も考えなくては行けませんね。

帆足 確かにそうです。ただ今の状態で一番の問題点は芸能においての自然な形での運営とい

うものが能では成り立っていないという事なんです。

公演をするにしてもお弟子さんに切符を買って貰って、一般的な観客があまり来ないというのは芸能として非常に不自然な状態なんですよ。お弟子さんがいなければ、どうにもならなくなってしまう訳ですから。今のままの公演形態ですと将来もやっていくというのは難しいと思います。今も様々な取り組みはしていますが、もっと一般に能を開放して「能が面白いんだぞ!」という事を知らせていく必要がありますね。

衣恵 帆足先生は近年「囃子堂」というホールコンサートを主催しておられますが、それも新しい観客を開拓していくというお考えがあつてですか?

帆足 ええ、あれは能の囃子を音楽として聞いてもらおうという企画なのですが、来て頂いた方の約半数が能を観た事のない人なんです。アンケートを見たら職業・トラックの運転手という人もいたり。そういった方々にも囃子を通して能に興味を持ってもらおうと思つてやっているので、案外評判が良いんですよ。

輝久 最近手軽に能を体験出来るワークショップ的な事が流行ってますよね。我々も今まで数えきれない程やってきました。

帆足 でも私はいわゆるワークショップ的な事というのはあまり賛成しないんです。だいたい能を観た事のない人に楽器を触らせてみた所で、いい音なんて出るはずがないんです。

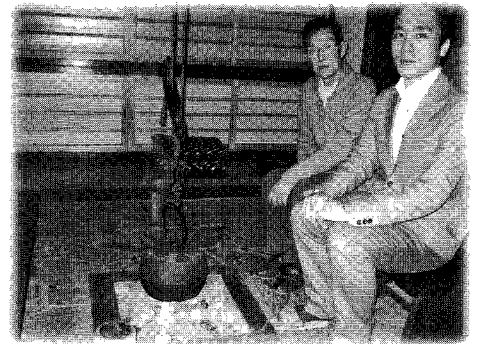
そんな事よりは身近に打っている所を見せて構えや音の強さ、気迫の激しさといったものを感じてもらった方がよほど意味があるんだろうと思います。

●地方都市の能

輝久 最後に地方の能について伺いたいのですが。最近ニュースなどを見ても中央と地方の格差が問題になっていますが、能も同じ問題を抱えていると思います。全ての事が東京中心になっている現状で地方都市の能は今後どうあるべきでしょうか?

帆足 逆に地方だからこそ良いという面も私はあると思います。まず他の娯楽が少ないので、色んな劇団やオペラが来る事も少ないですから、やりようによっては土地の人々に広く愛されるという可能性はむしろ地方の方があるんじゃないかと思います。

その点、大島家は福山にしっかりとした拠点がありますし、もっとも福山の文化の中心になっていいと思います。それだけの実績と内容を持っておられるし、何よりこれだけのスタッ



フが揃っている訳ですから。

衣恵 いえいえ、揃っているといっても家内興行ですから(笑)。家の人間でやってしまった方が何かと楽だという事もあって、なかなか外の人達を巻き込む所までいっていないのですが。ただ今後は外部の人達の新鮮な発想を取り入れるという事も必要になってきますでしょうね。

輝久 そうね、二人も嫁に行つてスタッフも減ってきてますから(笑)。

では話しは尽きませんがこの辺りで。本日は貴重なお話をありがとうございました。

第216回大島能楽堂定期公演 (2009. 4. 19)

久保博義 撮影



能「東北」
シテ大島衣恵



能「小鍛冶白頭」
シテ大島輝久



演能ご案内

2009年

開催日	催し名	開演	会場	鑑賞料	演目
9月20日(日)	第218回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「放下僧」 長田 驍 狂言「蝸牛」 茂山千五郎 能「三輪」 大島衣恵
9月22日(祝)	能を楽しむ 神前能	11:30 17:30	乙女座(大崎上島) 神田神社(呉市阿賀)	無料 要整理券 無 料	能舞「清経」 大島輝久 能「羽衣」 大島衣恵
9月26日(土)	喜多流青年能	12:30	東京喜多能楽堂	一般券 4,000円	能「班女」 大島輝久
10月18日(日)	福山総合文化祭秋の会	10:30	喜多流大島能楽堂	無 料	仕舞・素謡
11月1日(日)	広島大島会 秋の会	10:30	妙慶院	無 料	仕舞・素謡
11月15日(日)	第219回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「朝長」 大島政允 狂言「文荷」 茂山七五三 能「一角山人」 金子匡一
11月17日(火)	はじめての能楽大会	13:00	岡山後楽園能舞台	無 料	能学習発表・鑑賞会
12月2日(水) ~10日(木)	「清経」と「パゴダ」 能楽の古典と新作		ロンドン・ダブリン・ オックスフォード・ パリ		能「清経」 大島政允 英語能「PAGODA」大島衣恵・輝久 J.Cheong作 R.Emmert脚付

2010年

開催日	催名	開演	会場	鑑賞料	演目
1月3日(日)	新春能楽祭	12:00	沼名前神社能舞台	無 料	奉納「翁」 大島政允
1月17日(日)	喜多流新年初詣会	10:30	喜多流大島能楽堂	無 料	仕舞・素謡
2月28日(日)	喜多流職分自主公演	12:00	東京喜多能楽堂	一般券 6,000円	能「大会」 大島輝久
3月14日(日)	広島大島会 春の会	10:30	妙慶院	無 料	仕舞・素謡
4月18日(日)	第220回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「小袖善我」 大島輝久 能「小塩」 金子匡一
5月16日(日)	福山喜多会 社中追善春の会	10:00	喜多流大島能楽堂	無 料	能・舞囃子・仕舞・素謡
6月20日(日)	第221回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「源氏供養」 大島衣恵 能「国栖」 大島政允
7月28日(水)	福山八幡宮 薪能	18:30	福山八幡宮	未 定	未 定
8月8日(日)	三和の森光信寺 薪能	18:30	光信寺 (神石高原町)	未 定	未 定
9月19日(日)	第222回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「俊成忠度」 松井 彬 能「砧」 大島政允
10月17日(日)	福山総合文化祭秋の会	10:30	喜多流大島能楽堂	無 料	仕舞・素謡
10月31日(日)	大島久見七回忌 大島家先祖追善能		東京喜多能楽堂	未 定	能「景清」 大島政允 披露「道成寺」 大島輝久
11月7日(日)	国民文化祭 能楽の祭典	未定	笠岡文化センター (笠岡市)	未 定	未 定
11月21日(日)	第223回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「鉢木」 長田 驍 能「黒塚」 大島衣恵
11月28日(日)	喜多流職分自主公演	12:00	東京喜多能楽堂	一般券 6,000円	能「鬼界島」 大島政允

喜多流大島能楽堂

〒720-0814 広島県福山市光南町2-2-2

TEL 084-923-2633

FAX 084-923-8730

http://www.noh-oshima.com

編集デスクより

- ・北吹公演を無事成功裏に終えた5月、暑い薪能の季節から早、秋風の今日この頃、多くの皆様のご協力のおかげで創刊から10年無事20号を発行することができました事、深謝です。
- ・12月、大島家としては新作英語能へ初チャレンジ。ジャネット女史の情熱に応えるべく努力あるのみです。ヨーロッパでの9回連続公演が成功しますように！ (Y.O)